

E-4 富山県における農家の変容について —礪波市散村における住生活—

富山大教育 新福 祐子

1. 礪波平野における農村は1軒ずつまばらに建つ散居である。この地方には南西からのフェーン風を避けるため、敷地の南西の方角に杉、ケヤキ、竹などの屋敷林が繁茂し、これを背にして東向きになった住宅がほとんどである。定型化されていた散村住宅も最近の近代的生活への適応のため、急速に変化しつつある。この変化過程を通して住まいと生活との関係を明らかにしたい。

2. 礪波市五郎丸全域160戸に対して各戸別訪問による住宅調査を行なった。調査項目は、敷地内建物の配置、間取り、部屋の使い方、建て増し状況などについてである。

3. 1) この地域は地理的条件その他から1軒当りの構えは大きく、特に住宅の関心度が高い。

2) 住宅の形態、広さ、間取りなどから身分による格差が明白にみとめられ、封建的時代における考え方が住宅のあり方に残存していることをみとめた。

3) 住宅形態の原型である「ひろま、ざしき、にわ」という間取りは、「へや、茶の間、ながし」の建て増しにより変形した。また、にわの利用度の減少、川水使用から水道への切りかえによるながしの台所への格上げ、いろいろの移動など絶えずその時代の生活に適応するため住宅は流動的である。

4) そして現在更に大きく変容しようとしているが、この地方独特の住宅への考え方は依然伝統として根強いものを感じる。